

---

# 浪漫記

— . —

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

浪漫記

### 【Nコード】

N3731Z

### 【作者名】

一・一

### 【あらすじ】

東屋清次郎の目が覚めると、そこは見慣れた自分の部屋だった。彼は窓を開け、朝日を浴びる。

一面の青。彼の眼前には海が広がり、見れば小舟も浮いている。雑然とした色。アパルトの一部屋に一軒家一つづつを無理矢理詰め込んだ様な凹凸を繰り返す、雑然とした巨大な構造物。

外のそれは、彼にとってあまりにも見慣れない光景であった。

〃〃登場人物紹介〃〃（ネタバレを含む）（前書き）

いい加減わかりにくくなって参りましたので登場人物の設定を設定帳から引用してまとめます。

なお、作者は川上稔氏の設定方法を若干改造したものを採用しております。

激しくネタバレを含みます。ご注意くださいませ。

〰〰登場人物紹介〰〰（ネタバレを含む）

1：名前

東屋 清次郎

（よく清十郎と誤タイプするので注意）

2：種族

人間

3：職業

高校二年生

4：年齢

17

5：身体的特徴

背は170と男子としては標準的。帰宅部のため、筋肉もそこまで無い。髪は校則に引つかかるか引つかからないかのやや長め。

特にこれといった目立つ特徴は無い、極平凡な学生。雰囲気はやや落ち着いた子供と言った感じ。

6：服装の特徴

制服は可能な限り楽な風に着崩す。簡素でカジュアルなものを好む。正装なども着られるが、どこか落ち着かなくなってしまう。

7：表情的特徴

喜

多幸福感を覚え、やや声が高くなる。多弁で、完全に油断した状態。

怒

口調が荒々しくなる。

基本は睨んだりしての威嚇。物に八つ当たりする。皮肉がやや鋭く、攻撃的になり、嫌味も混じってくる。

激怒した時は、我を忘れて相手に掴みかかる。大抵はそれで暴れた後、自己嫌悪に陥る。

哀

現実味がない、または認めたくない程の悲しみの時、

泣きはしないがそのせいでストレスが蓄積し、非常にやや外向きに発散しようとする鬱になる。

雰囲気は極度に沈み、対人の時も態度がかなりいい加減になって、切れやすくなる。

比較的軽い悲しみは外見的には無表情のため、あまり気にしていないように見えるが、わりと引きずる。食べ物か琴音、または智子を弄ることで解消する。

楽

適度に笑う。主人公らしいややサヨク気味（自由、平等などの尊重）の思考を持つ。

8：性格

変人クール。わりと冷静で、かつ思考力がある。おかしいと思えるものにはしっかりとおかしいと言える。極度の味音痴。

行動原理は「良心」「単純な欲求」。

価値基準は「他人 自分」。良心に従うときのみ、他人に重きを置く。

他人から見れば意外と言えるほど人情、義理に厚い。約束は可能な限り守ろうとするが、受けた恩はちゃんと礼を言って返す。

学校の教育の賜物か、ややサヨク気味の価値観。

どこまでも世間一般の倫理観に従う紳士。衆愚らしく自分に直接的な関わりがないものについては感情と一般常識で是非を考える。社交性はそこそこあり、親しい者に対するノリは良い。やや皮肉屋な面も。

妹の琴音に関しては、やや構い過ぎる。

自己評価が低く、自身が長期間の努力を要する物に関しては諦めが早い。

影響を受けやすく、強く何かを正しいと言われたり、一見筋道が通つてるように見えてしまうと、自分の考えは早々に捨ててしまう。なお、エロには無関心である（ただし琴音を除く）。

本質は「平凡」。

9：経歴

0：清次郎誕生。

3：琴音誕生。

6（小1）：琴音の読書開始

10（小4）：琴音を夏祭りに連れて行く

12（小6）：琴音が倒れ、病院へ。

16（高1）：琴音死亡。ダウナー系鬱へ。

17（高2）：イデアーロピアへ。琴音と出会う。

1：名前

東屋 琴音

2：種族

人間（琴音の偽物）

3：職業

中校生。東屋家次女。偽妹

4：年齢

14

5：身体的特徴

150強。髪は背中の中程まで垂らしたロングで、一部分ツインテールにしてある。いわゆるツインター。

年齢が年齢のだけに、顔は智子に輪をかけて幼い。目はジト目のような感じ（フラット）。

雰囲気としては賢そうな子供。

基本家にこもっているので、筋肉、及び体力は無い。

貧乳で、日頃「胸なんてただの贅肉」と言っているが、何だかんだ言って気になっている。

6：服装的特徴

私服は専らスカートの裾が長い物。寝間着はネグリジェを好んで着用する。イメージカラーは黒or薄紫。

学生服はしっかりと着る方。

7：表情的特徴

喜

若干口の端が釣り上がり、若干口数が多くなる。

怒

無口なのが更に無口になり、対象を意図的に無視する。  
もし対応するにしても、一々嫌みたらしくなる。

哀

大泣きするのではなく、静かに悲しむ感じ。

楽

基本、表情に乏しく必要最低限の事のみ話すクール娘。感情の起伏はそれなりだが、そこまで表に出ない。

エロには知識はあるが、羞恥心が必ず先行してしまう。

8：性格

行動原理は「好奇心（主に知識欲）」、「兄妹愛」。

価値基準は「他（清次郎＞本＞他人＞自分）」。他人に依存する傾向にあり、また、兄の清次郎の判断に全幅の信頼を置いている。家にいることが多いが、よく外へ書店巡りに行く。

行動パターンとしては、ほとんどが書店巡りか自宅で読書、兄と遊ぶの三択。

文学少女であり、本の影響で思考がかなり乙女。ちなみに料理は東屋家では唯一上手。

兄に愛情をいだいており、こちらもまたブラコンの一言か。大抵人を特徴を捉えて「〵〵の人」と呼ぶ。

9：経歴

0：誕生。

3：清次郎による読書開始。

7（小2）：夏祭りに強制連行

9（小4）：病により倒れ、病院へ

13（中1）：死亡

14（中2）：イデアーロピアにて兄と再会？



1：名前

東屋 智子

2：種族

人間

3：職業

高校二年生。東屋家長女

4：年齢

17

5：身体的特徴

170弱。妹の琴音と比較すれば大体10cm程度の違いか。

髪は腰ほどまで伸びている。

若干釣り目気味で、顔つきは歳相応のあどけなさを残している。雰

囲気は大人しい方の部類。

だが本人の行動や態度、その他で大人びた風に周囲からは見られている。

無駄な贅肉といったものは無いが、特に筋肉が付いているという訳でもない。

胸は結構あるほう。

6：服装的特徴

基本軽装。嵩張るものは持ってかない。体面を気にするため意外と服には気を使う方。

状況分けして使われており、公式の場や相手が真面目な人だときちつとした服。

極プライベートならカジュアルな感じ。イメージカラーは白or黒。

## 7：表情の特徴

### 喜

常時微笑み。テンションが高くなる。

他人と一緒にの時でも声が若干弾み、ジェスチャーも大振りになる。

一人の時は、いつものようにボヤ顔にならずに幸せそうな顔で喜びの原因を思い返し、ひたすら悦に浸る。

### 怒

常にどこかに理性は残ってはいるが、怒りが積み重なると口調や発想が幼児退行する。

また、忘れはしないがその場が終わるとケロッとまた元の調子に戻る。割りとサッパリ系

### 哀

滅法弱い。表面上はなんとか取り繕ってはいるが、親しい者からは普通にバレる。

他人と一緒にの時は不自然にならない程度に、可及的に明るく振る舞う。

一人の時になって初めて泣くか、もしくはその原因があまりにも重い場合は不貞寝してしまう。

### 楽

友好を示すため、他人と一緒にいるときは微笑んでいることが多い。逆に一人だと暇さえあれば黙ってあれこれ考え事をしているため、基本ぼやっとした顔（略称：ボヤ顔）になる。

相手の理解と関心を促すため、あれこれとジェスチャーを交えて話す。

## 8：性格

行動原理は「欲望」。基本的な価値基準は「利害（自分＞家族＞友人＞その他）」。

つまり、自分のしたいことが精神的、肉体的、社会的な利益、または害が及ぶかを判断し、行動する。

合理的及び効率的、多角的、巨視的、本質的（それが初めに作られた目的）に物事を考える癖がある。好きな言葉は「初心忘れるべからず」「memento mori」。

やや集団主義的な独特な考え方をする。なぜか清次郎にはかなり入れ込みがある。

口調は女らしい。

料理の腕はマイナスな方向にEX級。何か作るたびにクリーチャーができる。

本質は「利害」「第二の物差し」。

〳〵登場人物紹介〳〵（ネタバレを含む）（後書き）

イラストとかも載せて詳しく書けたらいいなーとか考えてます。

ちょいちょい更新していく予定。

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか。

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか。

胡蝶の夢、という言葉がある。

その昔、中国の思想家である莊周が考えた説話だ。

夢のなかで自身が莊周であることも忘れ、蝶としてひらひらと舞っていた。しかし、ふと目が醒めると自身が莊周であることを思い出した。

そこで莊周はある疑問を得た。

すなわち、「莊周である自身」が「胡蝶の夢」を見ていたのか、それとも「今の自分」は「胡蝶が創りだした夢の産物」なのか。

東屋清次郎は考える。

……これって夢、なんだよな。

自室の窓から外を眺める彼の視界の大部分は、青が占めていた。

青　すなわち、海と空だ。空の雲は少なく、海からは波打つ音がこちらまで聞こえてくる。彼がすぐ下の方を見ると、そこらを行き来する小舟さえ見えた。

清次郎の家は都心の住宅街にある。しかし、今自室の窓から彼が見えているものは、見えるはずのない海だった。

不安を押しつけた抑えがたい好奇心に駆られて、清次郎は窓から身を乗り出してぐるりと外を見回す。

結論から言えば、清次郎の住む家は巨大なアパートメントの様な建物になってしまっていた。アパートの一部屋に一軒家一つずつを無理矢理詰め込んだ様な　あるいは、建築物をまるで積み木を積みよつにしてできた様な　凹凸を繰り返す、雑然とした巨大な建築物である。

水面から彼の自室までの距離は、遠い。ざっと数十メートルほどの高さはあるだろう。清次郎はそれを見て空恐ろしさを感じた。潮風が海の匂いを運び、清次郎の頬を撫でて行く。

「日本沈没……ってか？」

一説によると、夢の内容は人の深層心理に影響されるものらしい。

……いやあ、ヤバいだろ俺の深層心理。破滅願望まで来るのはやりすぎだ。

やや引きつった苦笑を漏らし、彼は頬を掻く。

しかし、破滅願望から来る夢だったとしても、この世界は明らかに妙だった。もしこの世界が清次郎の考えるそれだったとしても、荒んだ様子は無く、むしろ穏やかな印象さえ与える。

……というかそもそも、なんで俺はこれが夢だと自覚できる？

夢にしては、あまりにも鮮明過ぎて、あまりにも現実的過ぎる。意識もはつきりとしている。

明晰夢というものか、と清次郎は大体アタリをつける。彼は詳しいことは忘れてしまっていたが、それが夢だと認識した状態で見られる夢のこと、という概要だけは記憶している。

……深く考えても仕方がないな。

彼は一旦思考を破棄し、また別の方向へと頭を巡らせ始める。

……さて、どうやって帰るか。

顎に手をやり、考える。彼にとって今、最も重要なのはそれだった。

彼は寡聞にして夢から覚める方法というのを知らない上に、とんと見当もつかなかった。ある本では明晰夢の場合、いくつかあるタブーを犯すと目が醒めてしまうというらしいが、彼が最後にその本を読んだのは相当昔のことで、大部分を忘れてしまっていた。

「食う、寝る、飛び降りる……？ さて、なんだったか……」

頭を捻って夢から覚めるパターンを思い出していると、背後でガチャリと扉の開く音がした。考え事に集中していたせいか、廊下からの足音には気づかなかった。

「セージロー、昼ご飯できたわよ」

そう言って部屋に入ってきたのは、一人の少女だった。

歳は清次郎よりも一つ二つ上といったところか。大人らしい落ち着いた雰囲気、やや釣り目気味な歳相応のややあどけなさを残した顔つき。少し高めの身長と、途中を髪留めで一つにまとめられた腰ほどまである長髪が印象的である。

「……………」

清次郎は驚き、困惑した。いくら記憶を探っても、目の前の少女に該当する人物が思い浮かばなかったからだ。辛うじて薄ぼんやりと何かを思い出すが、それは全く判然としない。

「……………誰だ？」

思わずぼろりとこぼしてしまった言葉に、清次郎は少し無作法だ

ったかとひやりとしたが、予想外に少女の反応は自然なものだった。  
「ちょっとセージローったら、まだ寝惚けてるの。日曜だからって、少し寝過ぎだったんじゃない？」

彼女は長髪をいじりながら、苦笑する。

「早く下に降りてきてね。でないとお姉ちゃんのこと忘れられないように、また昔みたいに添い寝しに行くわよ」

「あ、ああ……」

清次郎の勢いに吞まれての返事に彼女はよしと一つ頷き、髪をいじっていた方の手を振ることで退室を告げ、部屋を出ていった。

……姉。姉だって？

姉を自称する少女が出ていった扉を、信じられない気持ちで見つめる。

そもそも、清次郎には姉がない。つまりそれは、彼女がこの夢の世界の住人であるということだ。

「姉萌えにでも目覚めていたのか、俺の深層心理……」

我ながら訳がわからんと苦笑交じりに溜息をつく。

そこで、ふと清次郎はある記憶を思い出し、同時に焦燥にも似た感覚を覚えた。

……思い出した。確か、明晰夢のタブーは。

明晰夢のタブー。それは「怖がること」、「驚くこと」、そして



「深く思考すること」。つまり、心拍数を上げる行為や脳を活発化させることだ。

「……どういうことだ」

彼は窓から下を覗いた時に、空恐ろしさを感じていた。いきなり部屋に入ってきた少女に驚いた。そして、現状を把握しようと思案していた。

形容しがたい感情に駆られ、慌てて胸に手を当てた。脈打つ鼓動は、確かに早い。

それらから類推される事実の一つ。

「これは夢じゃ……ない？」

そして、清次郎はふとある言葉を思い出す。

……胡蝶の、夢。

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか。（後書き）

初めましてな方は初めまして。知っているよな有り難い方はこんにちは。一・一です。

しこしこと「完成までどこにも公開しない」と頑張っていたのですが、遂に決心虚しくつい投稿してしまいました。

私的に二度目になる長編にレッツトライ。

どうぞ、生暖かい視線で見守ってやって下さい。

やってるブログなど

<http://control.blog.fc2.com/control.php>

次回更新 2011/12/19

2011/12/19：読みやすさ重視で台詞と思考の部分を上下一段落下げました。

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか？

清次郎は漠然とした不安を抱えていた。

唯一の救いがあるとすれば、目覚めた場所が見慣れた自室であったということだけだが、それも再度窓の外の様子を見てから改めて自室を見渡すと、とたんに清次郎は居心地が悪くなってしまった。どこか、ここが自分の家ではないような気がしてきたからだ。

しかし、こういう状況であつてもヒトの身体とは意外と素直である。腹の虫が喚き出してから初めて空腹感を覚えた清次郎は、ともかくにも腹を満たそうと考えた。

幸か不幸か、起きた時間はちょうど昼時。姉を自称する少女も、下に昼食があると言っていた。

「……まずは昼飯食ってから、だな」

……そういえば、これが夢じゃないってことは、あの女も実在の人物なんだよなあ……。

もしも下にいれば、色々と聞いておこうと考え、彼はともかくにも昼食が待っているであろうリビングへ向かった。

こちらの家の中は、彼が元いた時とあまり変わらなかった。変わったことといえば、北側の窓が少なくなっていることと、二階に見慣れない部屋が一つ増設されていることぐらいだろう。

空腹を抱えたまま辿り着いた先のリビングには果たして、少女はリビングで昼食をとっていた。

もくもくと咀嚼していたパンを、その白く細い首にコクンと嚥下してから彼女は言う。

「やっと来たのね」

清次郎は答えようとしたその直前に、腹の虫によって返事を横取りされてしまった。

少女はくすくすと笑い、台所のカウンターを指した。

「そこにパンがあるわ。適当に切って食べて頂戴」

なおも顔を綻ばせる少女に、清次郎は気恥ずかしさで言うことも言っ気になれず、黙っていくつかあるパンの内の一つを切って食卓についた。

食卓にはジャム瓶が並んでいる。適当なジャムをパンに塗りたくる。

「あ、それオレンジピールパン……」

「……あ？」

手を止めてパンの切れ口を見てみると、確かにそこには点々と黄色の粒の様な物がパンの白さに混じっていた。

清次郎は構わずピールパンを頬張る。

「多分そのジャムとじゃ合わない……あーああ」

たっぷりと咀嚼して味わった後、嚥下する。少女はその様子を信じられないものを見るかのような面持ちでじっと見つめていた。

「ふむ……」

「お、美味しいの……？」

「まあ不味くはない」

おずおずと聞いてきた少女に、ほれと一つピールパンを渡すと、

少女は少々不安げな表情でパンに清次郎の付けていたものと同じジャムを塗り付け、食した。

「ん、んん……んんん？」

もくもくと咀嚼するが、一度噛むたびにその表情は苦々しく、悲しそうで、何より不快そうな表情へと変わって行った。

「ちよつと、何この微妙な味！？」

余程不味かったのだろう。遂に彼女は我慢の限界とばかりに机を叩いた。

「口に物を含んで喋るな。モノが飛んでくる。母親に教わらなかったのか？」

「ぐっ、ぬう……」

彼女は即座に口を閉じた。清次郎の言っていることが正論であると分かる程度にはまだ理性的であるらしい。

ようやく嚥下できるまで噛みきったのか、こくんと飲み下して早々に彼女は何とも言えぬ表情と共に大きなため息をついた。

「この、味音痴……！」

「味音痴なものか。単に好みの問題だろう。ほれ、口直し」

ジャムを塗ったパンを手渡し、少女は清次郎を睨みながらもそれを奪い取るように受け取り、頬張り、途端にまた苦々しい表情になった。

「まずっ！ これ、ピールパンじゃない！」

「おつとすまないどうやら間違えてしまったみたいだ悪気はなかったんだ本当にすまない」

「嘘つくなっ！ エンマさまに舌引っこ抜かれて味音痴修正されちゃえー！」

「そうだなケファイアだなー」

なおもわんわんと喚く少女に、清次郎は開いている方の片手をひらひらとさせて適当に流す。どうやらこの少女、激情を起こして精神がやや幼児退行したらしい。

「むづうう……………」

彼女はなお憤懣やるかたないといった様子で腹立ちまぎれにパンを頬張る。しかし、その頬張ったパンは件のジャム付きのそれであったため、彼女は不意を突かれた形で悶絶した。

「……………もしかするとわざとやってるのか？ それともバカなのか？」

「見えてなかったのよ、もう！ うう、美味しくない、まずい……………」

半ばヤケクソ気味に返す彼女に、適当な相槌を返して彼はまたジャム付きのピールパンを頬張った。それを見た少女は気分が悪そうに外方を向く。まだ味が残っているのだろう。少女は恨めしそうな目で清次郎を睨むが、その彼は無視して黙々と昼食を続けた。

パンを食べ終えていい具合に腹が膨れてきた辺りで、清次郎は本題を切り出した。

「それで、誰だお前」

「え、ええっ？ そ、それまだ続いていたの？」

やや面食らった表情だった少女が、しかし急にその顔を真剣なものへと引き締めた。清次郎のそれが、まったく真剣そのものだったからだ。

「私は私、東屋智子よ。もしかして、本当に私の顔を忘れちゃったの？」

「忘れたも何も、家族は俺の他には母さんと父さん……それから琴音だけだ。姉は最初からいない」

「意味がわからないわ。あなた、夢でも見てて、まだ寝惚けているじゃないの？」

東屋智子を名乗る少女は詰め寄るように語気を強める。若干苛立ってきたのか、彼女はきつく髪を巻きつけるようにして長髪をいじっている。

彼女の言葉に、清次郎は胸中で舌打ちした。また「胡蝶の夢」の時の感覚　不安を駆り立てる、筆舌に尽くしがたい不快感　を思い出してしまったのだ。

「……わかった、じゃあそっちは一旦置いておこう」

逃げるように話題を変える。彼にはこれ以上「自分の現実世界」を否定されるのが耐え切れなかったのだ。

「次の質問だ。ここは何国の何県、何市、何町なんだ？」

清次郎の質問に、智子は怪訝な顔をする。その表情を見て、直感的に清次郎はその質問が自分の首を確実に絞めていたことを悟った。

「何国ってあなた……。ここはイデアーロピアよ？」

反射的に聞こえなかった振りをしようとしたが、遅かった。  
がつんと脳に衝撃が来た時のように一瞬、世界が暗転する。

「イデ、アール、ピア……？」

「そう、水上立体型都市アルコロジ、イデアールピア。これも忘れた？」

真剣な面持ちで詰め寄る智子からの聞きなれない言葉に、清次郎は目を白黒させる。

「いや、忘れたも何も……」

「……知らない、ってことね」

引き継がれた言葉に頷く清次郎の様子を見て、智子の髪の毛のいじり方が指に絡ませた髪の毛を強く引き絞るものに変化する。その目には、見た者を射抜くかのような鋭さがあった。

「ねえ、それじゃあ逆に聞くけど、あなたは誰？」

「東屋清次郎だ」

「今まで住んでいた町は、どんなところだった？」

「普通の町だ。少なくとも、ここみたいに建物の上に建物を建てるような町じゃなくて、地面に広がるみたいにして建物が建つ、普通の町だった」

「……道理で変だと思ったわ」

智子はやれやれといった風に大きなため息をつく。清次郎はそれに怪訝な顔をした。

「どういうことだ」



「今から伝えることは、まだ推測域を脱していないわ。それでも、聞きたい？」

清次郎が無言で頷く。彼女はそれを認めると、一息ついてから口を開いた。

**提題一：今、己が認識している世界は現実であるか。？（後書き）**

次回更新は一週間後（2011/12/26）になります。

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか？

並行世界という概念がある。ある世界から分岐し、複数の世界が並行して存在する、というものだ。

智子の考えた説とは、つまり「清次郎が元いた世界」と「この世界」がそれではないかというものだった。

「で、両方の世界にはそれぞれ清次郎がいる。でも、何らかの現象によって二人の精神が入れ替わった、と。こんな感じだと思うわ」

「……………成程」

こちらに向けられた紙を見て唸る。

紙上には大きめな二つの円が描かれていた。

二つの円にはそれぞれA、Bと名前が書かれている。そして、その中にはやや歪な「清次郎A」「清次郎B」とこれもまた名前の振られたヒトガタが描かれていた。

清次郎AとBは両側を指した矢印で繋がっており、矢印の上には「精神交換」と記されていた。

「……………ねえ。今ふと気付いたのだけど、あなたと私って、つまりは初対面だったってことじゃない？」

「ああ、そうなるな」

清次郎が頷くと、智子はなぜか微笑んだ。

「ということはあなた、初対面だとわかってて私に嫌がらせしてたってことよね？」

「ああ、そうなるな」

清次郎が頷くと、智子はなぜか頭から縄が引き千切れたような音を発した。

「初対面に嫌がらせてって常識的に考えてありえないでしょう!？普通に!」

「普通自分の家に知らない誰かがいたら泥棒と思うだろう?」

「普通泥棒が家にいると思ったなら警察に連絡しなさいよ……!」

「普通異世界に来たばかりの男に、それを言うか」

「ぐ、むう……」

結局、智子は口を閉ざし、唸る他なかった。異世界に迷い込んできたばかりの清次郎に、この世界の常識を要求するのは筋違いである。そのような正論が理解できる程度には、彼女も常識的であった。

……それにしても、並行世界の自分と精神交換か。

清次郎は自分の中で何かが合致する感覚を得ていた。

実のところ、半ば彼はてつきり異世界にでも迷い込んでいたと思っていたのだ。

しかし、もしそうだと仮定すれば自分に縁のあるモノ 清次郎の自室がその代表例である があるのは明らかにおかしい。この矛盾で、彼はボタンを掛け間違えたかのような思いをし、しかしその問題の解決を先延ばしにしていたのだが、なるほど智子の説は明快かつ筋の通ったものだった。

しかし、仮にこの世界が彼女の言う通りだったとして、現象が暫定的に説明できても問題点はまだ解決していない。

「で、当面の問題はこれから俺はどう振る舞うか、なんだが」

面倒な問題である。

彼はもう一人の自分に会ったことがないが、恐らくもう一方の清次郎とは若干性格に差異があるだろう。つまり、精神交換してしまった今、それぞれの清次郎は互いが互いを演じる必要性がある。

……俺の方の世界に行つた俺も災難だな。

もつとも、元の世界での清次郎の振る舞いは閉鎖的なものだったため、戸惑うことはあつてもその面ではそこまで苦勞するようなことは無いと彼は予測したが。

「そうね。できるだけ貴方の世界にいた時みたいに、自然にして頂戴」

「自然に……？ 戻れるかどうかはさておき、人間関係がややこしいことになるだろう」

「安心なさい。貴方とセージローは、絶望的なまでに味覚音痴なところも会話がマイペースなところも、その図太い精神構造も、全く嫌になるぐらい似ているわ」

並行世界だからなんでしょうね、と智子は苦笑気味に呟く。

「入れ替わったのは酷似した精神だけ。外見が変わっていないなら、よっぽど奇特なことでもない限り、誰も貴方が貴方だとは気付かないわ」

「……何かあつたら、フォローは頼むぞ」

「ええ、お安いご用よ」

一抹の不安を残るが、今、清次郎には智子しか援助者がいない。彼は若干の疑念を抱きながら頷いた。

「さて。ちゃんとした自己紹介がまだだったわね。私は東屋智子、長女よ」

「長女。俺の上か？ それとも下か？」

「貴方より一つ上よ。家族構成で言うと、今は旅行で出ている父さんと母さんがいて、上から私、セージロー、一番下に貴方と三つ下の妹がいるわ。」

昼頃にはって言うていたし、そろそろその妹も帰ってくる頃合いなんだけれど」

智子の言葉に応じる様に、玄関の方から扉の開く音とともに「ただいま帰りました」という声が聞こえてきた。

……今の、声。

やや無愛想で感情に乏しい、少女の高い声。それは、彼にとって馴染み深く、聞き覚えのあるものだった。

「噂をすればなんとやら、ね」

智子は髪をいじっていた手で外人の様に肩を竦めてみせる。

……誰だったか。

思い出せず頭を捻るばかりの清次郎は、リビングと廊下の繋がる扉が開いて出てきた人物を見て、ようやく声が誰のものだったかを知り、そして思い出した。

「ああ、兄の人はようやくお目覚めですか。おはようございます」

無表情に軽い会釈を送ってきた少女に、清次郎は戦慄した。

目の前の少女は、小柄だ。髪は姉よりもやや短く、背中の中程までのツーサイドアップ。やや眠たげな目が印象的で、感情の起伏に乏しいその顔は歳相応に幼い。

……ああ、ああ……。

意味を成さない、ただの詠嘆が彼の頭を満たす。それ程に彼は衝撃を受け、感情は混沌としていた。嬉しくもあり、怖くもあり、悲しくもあり、疑わしくもあった。

身を戦慄かせ、目を見開き、呆けたように口を開けている。その時の彼の表情は、まるである種の亡霊を見た時のそれに通ずるものがある。いや、「まさしく」亡霊を見る時のそれだった。

目の前の少女の名を、清次郎は知っている。

「琴音……」

言ってから、彼は反射的に「バカな」と胸中で自身の言葉を否定した。

それもそのはず。清次郎の妹、東屋琴音は一年前に病死している。本来存在し得ないはずなのである。

しかし、亡霊はそんな胸中の彼の言葉を否定するように、応えた。

「はい。何でしょうか、兄の人」

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか。？（後書き）

次回更新 2011/12/1/3



提題一：今、己が認識している世界は現実であるか？

東家清次郎には仲の良い一人の妹がいた。

妹の琴音は幼少期から内向的な少女で、いつも兄である清次郎の後ろに付いて来ていた。

清次郎は、未だに憶えている。二人がほんのまだ小学生の頃、毎日のように琴音にせがまれて、本を読み聞かせてやった。二人でページが見えるよう、琴音を膝に乗せ、多くの本を読んだ。

最近の清次郎は、本をあまり読まない。元々、幼少期から本が好きだというわけでもなかったのだ。しかし、彼はひとたび可愛い妹に「これ読んでください」とせがまれると、たちまちその頼みを聞いてやりたくなってしまい、結果いつものように琴音をちょこんと膝に乗せ、本を読み聞かせてやってしまうのだった。それがつまり、彼の読書が続いていた理由である。

読書の他に、琴音は夏祭りが何より好きだった。

これもまた二人が幼い時分、清次郎はふと琴音の人見知りの程度にある種の危機感を懷いた。そこで琴音を人に慣らそうと一計を案じた清次郎は、ちょうどタイミングよく近所の神社で開催される夏祭りへと半ば強引に琴音を連れていった。

計画の構想に夢中になる清次郎にいつもの読み聞かせをおざなりに済まされた上、何の予告もなしにいきなり苦手な雑踏に連れ出された琴音は、初めこそ困惑と不機嫌さを露にしていた。だが、清次郎がねだって母から貰った小遣いを片手に、二人で店を回ってみていく内に、人混みにこなれて来た琴音は最後には楽しそうに笑っていた。特に、最後の花火は痛く気に入ったらしく、彼女はやや興奮気味に「毎年見に来ましょう」とまで言っていた。

それからというもの、年に一回、夏祭りへ行くことが二人の習慣となった。

その時期の二人は、まず間違いなく幸福に満ちていると言えた。

清次郎が小学校ももう卒業といった時、琴音は倒れ、病院へと搬送された。

その時の清次郎はたった一人の妹を案じた。親に妹の病気について聞いてみたが、何やら難解な言葉が出てきて、結局わかったことと言えば、妹は病気に罹ったということだけだった。

二人の読書は、妹が入院してからも続いた。学校が終わったら図書館へ妹にリクエストされた本を借りに行き、そのまま病院へ行き、妹に読み聞かせる。

中学生にもなった当時の清次郎にとって、この行為は非常に気恥ずかしいものであったし、もう大きくなってしまった妹に読み聞かせをするというのもどこか奇妙だと思ったが、やはりその時も清次郎はせがみ立てる妹に負けるのだった。

夏祭りは、医者に禁止されていけなくなってしまった。不幸中の幸いというべきか、祭りの花火だけは病院からも見えるため、その習慣だけは残った。

妹が入院した事自体には当初ショックを受けていた清次郎だが、時が経つに連れてそれも薄らぎ、いつの間にかに常と変わらなくなっていた。

環境も大きく変わったが、まだその時の二人は充分に幸福だったと言えた。

しかし、琴音の病状は悪化する一方だった。

最初の内はまだ元気な様子をしていた。見舞いに行くと、妹は兄に笑顔で接した。

数日経ち、数週間経ち、数ヶ月経つても、清次郎は毎日のように足繁く見舞い通いをした。琴音は必ず一度は笑顔を見せた。清次郎はその時、その笑顔を信じていた。

半年ほど経つ。清次郎の愛妹はまだ笑っていた。しかし、その顔は目に見えてやつれていた。そこでようやく、清次郎は琴音が無理に笑って見せていることに気が付いた。

無理も無い話である。彼の希望的観測が、自分の価値判断能力を

大きく鈍らせていたのだ。

彼は妹の病状に勘付き、それでも希望を求めた。彼が問いかけ、その問いを否定されることを、彼は切望したのだ。

しかし、彼は湧き上がる切望と同時に、その問いかけに一種の忌避感を覚えていた。彼はその問いかけが、今までのガラスの幸福を一瞬にして砕いてしまうものであると、直感的にはあるものの、理解していたからであった。

最終的に彼は、その問いを自分の胸に秘めることを選んだ。

ただひたすら放課後には妹に本を読んで聞かせ、年に一度の夏祭りの日には一緒に花火を見た。

妹は彼が気付いていないと、自分の希望的観測によって信じた。

こうして二人の脆く儂い幸福は、文字通り琴音が死ぬまで続いた。

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか。？（後書き）

次回更新 2012/1/6

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか？

イデアーロピアの琴音は結論から言つて、生前の琴音とほぼ一致すると言えた。

些末な違いもあると言えはある。しかし、彼女の本質は確かに清次郎の知る琴音と同じそれであつた。

清次郎はリビングのソファで読書をする琴音を眺めながら、思考する。彼の考えるのは、イデアーロピアの琴音と、生前の琴音の相違点についてである。

第一に、この世界の彼女がまだ生きていること。

元の世界では、彼女が患つた難病によつて死に至つたが、彼の短い観察から得られた情報から推察するに、どうにもイデアーロピアの彼女はその病から回復したか、もしくはそもそも病に罹つていなかったようであつた。

……並行世界でも、似てる所と違う所があるみたいだな。

そう清次郎は感覚的に掴んでいた。

第二に、彼女の様子がやや挙動不審気味であること。

彼女は先からリビングで黙々と本を読んでいる様であつたが、よくよく注意してみるとそのページは遅々として進んでいない。それどころか、何やらそわそわとした様子で清次郎をちらりちらりと盗み見ては、すぐさま本へ顔を引つ込めるといふ奇行を何度も繰り返していた。

初めこそ清次郎は、まるで巢の外を警戒する小動物を愛でる気分でその様子を眺めていたが、その奇行が二十回を超えた辺りで何か妙であると勘付き、四十回を超えた時点で直感確信へと至つた。

……明らかにおかしい。

しかし、清次郎の正体が見破られたという訳でもなさそうであった。もし彼の正体が露見しようものなら、彼女は疑いや不審、恐れなどを孕んだ視線を向けてくるだろう。

しかし、彼がその視線から感じたものは、  
喩えるなら、咆えるライオンに怯えながらも、物陰からその雄姿を覗き見る少年と言った感じの  
好奇心の類だった。

……正体がバレていない。それはいい。だが、何が原因で？

結局のところ、それがわからなければ意味が無い。それについては沈黙した部屋を断ち割り、本人に問いただす他無いのだった。

「なあ、琴音。さつきからどうかしたのか？」

「ひゃい！？ い、いえその……っ」

清次郎が呼びかけると、琴音はびっくりと反応して本から覗かせた目を彷徨わせる。

「その？」

「な、なんでもありませんっ。気にしないで下さい！」

そう言っただけでまた顔をうずめるようにして本に隠してしまった。本の端から覗く彼女の額や耳は、熟れたリンゴのように赤く上気している。彼はその様子を見て、これ以上聞いても恐らく何も聞き出せまいと判断し、一旦この問題を棚上げした。

再び部屋が沈黙する。

……まったく、なんなんだか。

彼は頭を乱雑に掻いてソファに身を預けた。ちょうど太陽が雲に遮られたのか、明るかった部屋が暗くなる。

「琴音、ちよつと良いかしらー？」

廊下に繋がる扉からひよいと顔を出したのは、智子だった。

「あ、はい。何でしょうか」

「ちよつと頼みたい用事があるから、こつちきて」

「え、ええ、わかりました」

ぎこちなく立ち上がった琴音が、智子に連れて行かれる。

「それからセージロー。私この後買い物に行くから、あなた荷物持ち手伝つて頂戴」

「ああ、わかった。準備ができたと言つてくれ」

清次郎は片手を上げて了解の意思を伝える。それを認めると、彼女はひよいと自分の髪をひと回し弄ってから、琴音を連れてリビングから去っていった。

三度目の沈黙を迎える部屋。部屋の明るさが揺らぐ。智子が来た時には雲も過ぎ去り、太陽が顔を覗かせていたのだが、どうやらまた雲が遮ってしまったらしい。

晴天にしては暗い部屋の中、清次郎はまた思考に没頭することにした。

提題一：今、己が認識している世界は現実であるか。？（後書き）

ついにストックが尽きましたノ（＾o＾）\ パンナコッタ  
これにより、更新がかなり遅くなります。

ブログの方の一月に一度更新（絶対防衛線）は死守致しますので、  
そちらでも眺めて暇を潰して気長にお待ち下さい。m（――）m

指摘された箇所を修正：2012/01/09

清十郎 清次郎



## 提題二：最善の選択は最善の結果を招くのであろうか

琴音を自室　元の世界には存在しなかった部屋だ　に招き寄せた智子は琴音をベッドに座らせ、自身も椅子に座ると溜息をついた。

「まったく、あなたはらしくもない。どうしたの」

「……久し振りに兄の人に会えたんです。緊張ぐらいますよ」  
「緊張。緊張、ねえ」

反芻するように言葉を転がし、姉は妹を観察する。

……相変わらず、か。

やや俯きがちなため表情は見えにくいものの、そこにはもはや彼女にとって見慣れた無表情が見て取れた。

視線は下。こちらを見ずに、大事そうに抱えた自分の本を見ている。その本を持つ手が若干強ばっているのは、他人の部屋に入ってきたための緊張が原因であるだけではないだろう。

……本人はポーカーフフェイス決めてるつもりなんだろうけれどね。

智子は胸中で溜息をつく。琴音が虚栄を張って嘘をついているのは、その態度から手で掴めるように読み取れた。

……まったく、目は口程にモノを言うってあっちのコトワザは本当なのね。

幼少期、その諺を清次郎しじろうに教えて貰ったことを彼女は思い出す。

この観察眼を養い、獲得したのもその時期だったことも、彼女は明瞭に憶えている。あの時は智子も、嘘をつくのが下手であった。ふと、その時に感じたものが急に思い出され、口を突いてきた。

「罪悪感」

降り始めた雨の様に、ぽつりと智子は呟いた。

「セージローに、罪悪感を抱いているの？」

「……………」

妹はその問いに、しばし沈黙した後にようやく頷いた。やっぱり、と姉は溜息をつく。

「あなたはあの時、清次郎に打ち明けなかった。つまり、あなたは清次郎を騙し続けることを選択した。そうね？」

確認に、妹は頷く。

智子は淡々と言葉の雨を降らせる。電気も点けず、カーテンも閉め切った部屋の白い天井はさながら暗雲の様にすら見えた。

「私はあなたに十分な説明をしたと思っているわ。じゃあ、なんであなたは自分の選択に後悔して、負い目を感じているの？」

「……………兄の人に」

ぎゅつと本を握り締める琴音の手が力を増した。白い指が、僅かに赤くなる。

「兄の人に嘘をつきたくない。偽りたくないんです、私は」

琴音の手が温度を失ったかのように小刻みに震える。彼女は本を胸に抱いて、震えを押し留めた。雨で本を濡らさぬ様に。

「今は、逆の選択肢を選べば良かったと思ってる？」

今の琴音は非常に不安定な状態だ。だから、智子はできる限り優しく問いかける。

「いいえ。私は最善を選びました。でも、それでも」

そこで、ようやく姉は妹を理解した。

……私は、随分と酷な選択肢を与えていたのね。

かつて姉は妹に選択肢を与えた。「最初から清次郎に全てを明かす」か、それとも「清次郎を騙し続けるか」、と。妹はその時、後者を選んだ。

……要するに、私は地獄の種類を選ばせていたようなものなのね。

針山地獄か血の池地獄か、どちらか選べと問われれば、誰でも両方とも御免被ると答えるだろう。それでも選べと言われれば、比較的にマシな方を選ぶのは自明の理である。

マトモな常識と良心のある者であれば、すぐにわかることであろう。しかし、これは無理も無い話であった。東屋智子は他者とは決して相容れない。決定的に「違う」からだ。

……でも、やらなきゃならない。

他でもない、自分自身がそう決めた。例え誰かが苦しんでいても、

安い同情などで中断などしない。果たさなければならないのだ、絶対に。

「じゃあ、もう一度あなたに訊くわ。あなたと私が初めて会った時にした問いよ」

琴音の濡れたように疲れ切った肩が、びくりと震える。それでも執着心に囚われた彼女は、義務感にも等しい何かに背中を押されて妹に大粒の雨をぶつけた。

「選択なさい。このまま清次郎を騙し通すか、それとも全てを明かしてしまうか」

提題二：最善の選択は最善の結果を招くのであろうか（後書き）

人間やレバデキルモンダナ

次回更新日：2012/01/21

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3731z/>

---

浪漫記

2012年1月14日18時51分発行